

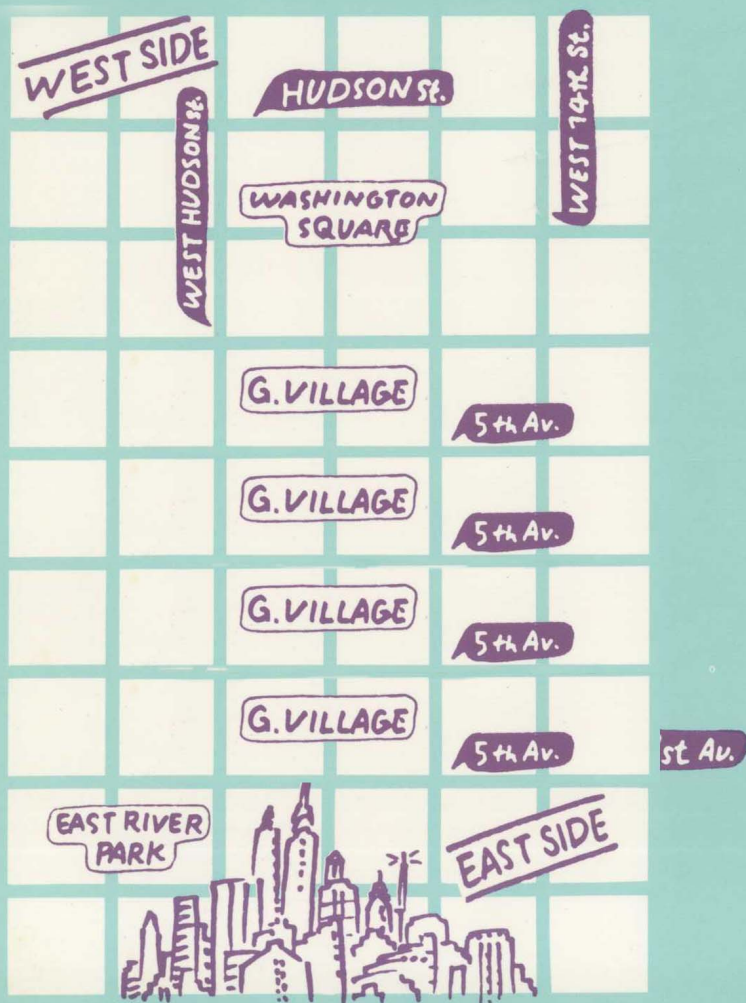
よ  
き  
に  
は  
か  
ら  
え

森村

桂

よきにはからえ

森村 桂



よきにはからえ

昭和五十一年七月二十日初版発行  
昭和五十一年十一月二十日再版発行

著者 森村 桂

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六二)五九二一

振替東京二二三四

©一九七六 検印廃止

よきにはからえ

1 ジョニー、ハロルド邸に招待される、のこと 5

2 ジョニーの誕生パーティー、のこと 19

3 何しろモテモテの話のあとは、のこと 30

4 ハロルド、ハーレムに住む、のこと 41

5 大財閥グリーンフィールドはかくのごとく変る、のこと 58

6 公演は大成功、ついでに邸も燃える、のこと 70

7 さてその翌日、とハーレムの住人たち、のこと 88

8 金塊・宝物・陳情者、のこと 105

9 バルバラ博士の大発明、のこと  
122

10 バルバラ博士の新研究室、そのほかモロモロ、のこと  
136

11 ハロルドは変身する、のこと  
153

12 ペテロの死、のこと  
164

13 ザ・セントウハウス、のこと  
170

14 ハロルド騒動テンヤワンヤ、のこと  
181

15 話がおわる？ のこと  
192

装  
丁

山  
口  
文  
雄

## 1 ジョニー、ハロルド邸に招待される、のこと

「あの女の人、まだ髭を生やしてる」ってことは、また、さっきの大通りに戻ってきたことか。ジョニーは肩にもつれた黒い髪を乱暴にかきあげた。四月ははじめの午後にしては太陽がまぶし過ぎるくらいだ。

地下鉄の入口の上には、女優さんがライター片手にウィンクしてる広告があるのだが、その顔には、太いマジックで髭がいたずら描きされていた。

「あとあの森しかないのに……」

ジョニーは、眼の前の森を見てうんざりしている。すでに三十分も家探しの苦勞を続けているのだ。世界一の大都会、ニュー・ヨークの中心から地下鉄で二十分、しかも駅前、こんな森があるなんて……そもそも、ふざけてる。大体あの森もあの森だ。奥行も相当ありそうだし、これではまるで、広げた地図の上に、大猫がドデンと坐りこんでしまったようではないか。おかげで、大通りを突き進んできた車は、そこからいやいや左右にわかれて走らされているみたいだ。こんなところに地下鉄の口なんかつけたってそうそうめったに人は降りやしないのに。

「どこもお役所仕事って同じね。それともこれからあの森開発するってわけかな？」

ジョニーは日本のまたたくまに出来上る造成地を思い出した。

このお話はニュー・ヨークのお話だけど、ジョニーは歴とした日本人のつもり。日本名だってある（いろんな名前が考えられそうで、いいいたいけど、実は本名を考えるのを、忘れた。お許しあれ！）。

なぜジョニーかという、アメリカに渡って来た当初、歌を歌えといわれ、当時流行っていた『ジュニーの寿命はあと二年』という反戦歌を、間違つてジョニーといって以来、彼女の渾名（ニックネーム）になつたわけ（最も一般的な渾名のつきかたであります）。

ボンヤリ立っていると、一台の車が、まるで閉め忘れた幕の隙間を見つけたかのように、樹々の間を分け入っていった。どうやら、この先にも家があるらしい。

「へえ、森の中に住んだの、あの人」

ジョニーは思いきつて大通りを横ぎった。道は舗装されていた。うっそうとした樹々がそそり立ち、暗くひんやりとしている。その陽の射さない所だけを選んでジョニーは歩いた。風はないけど、なんつたつたつて気分がいい。高くそそり立った樹々の先には、新芽が吹き出していた。

「いいにおい！」

ジョニーは思わず、息を大きく吸い込んで、足を止めた。忘れていたにおいを思い出したように。しかし、すぐにそんな自分の心を断ち切り、さっさとまた歩き出した。

エンジン音がした。ジョニーの姿など気にもとめないスピードで、すぐ脇を走り去る。森の深みが増してきた。家など一軒もありそうもない。地下鉄を下りてこんなに歩くななんて思ってもみ

なかった。

「私も、人がいいわ」

少々沈鬱な気分になったらしく、思い出す暇がなかった一年前までのことが頭に浮んだ——例えば、このジョニー嬢を流れ／＼てアメリカへという悲しい気分の人と想定すると、かつて彼女にも恋人がいたことにすると、話はトッテモ簡単。その恋人も、荒野を緑の牧場に変えるのだと、キラキラと眼を輝やかして語ってくれるような素敵な人。だが、彼の尊敬する先輩が交通事故かなんかであつてなく死んでしまったとすると、多分その青年はナイーヴだから、彼の中から夢は消え、その恋人は人生の不可解さに迷ったりするものです。そうなると、きっと虚しいものだとなつていたりして、どうしたことか、ソウ、彼は彼女のもとを去っていく。デモデモ、健気なお嬢さん、涙もみせず、大学を出て無事就職。ダガダガ、その会社は入る前に倒産したとして、そしてそのままアンニモ面白ことがなかったとするとどうなるか。マア、どこかがどうかなつて、あげくの果てに辿りついた場所が外国だったということになります。モチロン簡単に飛び出せるとも思わなかったのだけれど、ともかく、預金を全て持って飛び出した。……それから一年、ヤッパリ何も変化はなかった。そのうえオヤジさんとオフクロさんはすでに死んでいたとして……（以上想定オワリ。たとえお話の中とはいえ、身につまされる話はどうも苦手で）。

で、現在のことに戻って——それにしてもこうして、たまたまアルバイト先のカフェで知りあった、ふざけることでは妙に馬が合う、といって特に親しいわけでもないハロルドに招かれて、ヒョイヒョイ出かけて来るとは、私も相当暇なんだな、と今考えている所。

さて、お呼びじゃないらしいから帰ろうかと踵をもどしかけた時、突然、シュウオーツシュウオーツという昔懐かしい蒸気音がした。同時に、右手の樹々の間をとおしてモクモクとした白い煙がみえる。山火事？ ……いや、汽車だ。

「ジョニー！」

ハロルドの声だ。ヤレヤレ良かった、ジョニーの顔が、一瞬ゆるんだ。どこに今までかくれていた、と小さく低く呟くと、彼女は、小走りに林の中へかけこんでゆく。

パッと視界がひろがり、眼の前には、ペンペン草といかにも時代ものの、それでも二本……、線路です、これは。おまけに古びた煙突をたてた黒い機関車まで停っている。

「ジョニー、歩くなら、もう少し景気よく歩けよ。鉛のかたまりでも引きずってるなら別だけどさ。それにしてもよく来てくれた」

ブラウンの髪をした背の高い男が、デッキからジョニーを見下して両手をひろげた。粗い麻のシャツに茶色のスウェードのチョッキといったラフな服装で、いくらか肩を落し気味の、ごく自然なものごしで立っている。たった今、シャワーを浴びてきたという感じのさっぱりした顔付だ。

「何てどこに住んでんのよ」

それには答えず、彼はすぐ脇のホームを顎でしゃくった。さびた青いトタンの屋根に、ところどころペンキのはげた白い柵のある、でも停車場らしきものがあった。犬のおしっここのしみついたような停車場？ 素晴らしいことだ、これが偉大なアメリカ、しかもお話の中とはいえ、天下のニュー・ヨークだとは。嬉しくなってくるではないか。

「その汽車、本当に動くの？」

「ああ、立派なものだよ。時速三十キロは出る。確実に自転車の倍は早い」

ハロルドは振り返って駅員を眼で探してゐる風だったが、いきなり低い声で、「飛び乗れよ、今ならタダだ」

ジョニーは反射的に柵に手をかけ、ホームによじ登り、そしておっかなびっくり汽車の中に入りこんだ。タダ乗りとは懐かしい。

板の椅子に音たてて坐りこむ。垢と埃が表面にへばりついている。昔むかし、どこか遠くの山奥を走っていた客車の感じだ。お客はほかに誰もいない。きつと赤字線なのだろう。やがて、シューオーッという煙をはく音がして、ガタンと揺れた。動き出した。

樹々の連なりを抜けると、柔らかな緑の野菜畑である。くるくるとしたうす青い葉が陽に照らされている。ガタンガタンと列車は、さまざまな野菜の列に一つずつ挨拶するように走った。丸太造りの農家の前で、モンペのようにダブダブな紺の胸あてズボンの、太って大きな逞しいオバサンが振り返った。実にジツに決まったポーズだ。

汽車の左側には線路にそって自動車道が走っている。突然、ハロルドが腰を浮かし、窓の外に向って口笛を吹いた。キャデラックが追い越していったのだ。何の反応もない。相当なスピードで、ツンととりすまして走り去る。

「人が挨拶してゐるのに失敬な奴だ」 惘然とした様子でつぶやいた。

高級車に乗った人がこんなボロ汽車に返事なんかしますか。それにしても、彼は一向にこりな

い様子で、若い女の乗った車がやって来ると、身体を乗り出し、ヒューッヒューッと口笛を吹き続ける。だが、汽車のシュッシュッポッポという音で聞こえないし、車はあまりに速かった。

「そうだ、この道は、速度制限するよう申し入れよう」

ジョニーは思わず、吹き出した。ソウ、何しろハロルドの年齢は三十六歳、いわば中年男のはず（女の子は女になるけど、男は油断すると男の子になるのかしら？）。

「や、アンバランスじいさんだ」干し草をつんだ馬車に追いついた。鳥打ち帽子にコゲ茶色の胸あてズボンの陽に焼けた男が、干し草の上からこつちを向いた。

「よお、久し振り！」

しかし、彼は、ハロルドの挨拶に返事もせず、ボカンと口をあけたまま走り去る窓を見ているだけ。「この森の中の、牧場で働いてるんだ。ヤッコさんとのつき合いのコツは、こうしてすれ違った時には、すかさず手を振ることさ。それだけでいい。うっかり家の中に招き入れてみる、家中牛のにおいになる」

「牛のにおいか。……懐かしいな」

ジョニーは遠くなった馬車の男を振り返った。大学の一年と二年、夏休みには北海道の牧場でアルバイトをしてたんだっけ。それにしても、あの馬車の人、ハロルドをはじめ見たような表情だった。どうしてなんだろう。グリニッチ・ビレッジのカフェで会うハロルドも、どこかおかしい、ギゴチナイ。私がコーヒーを運んで行った時だけ、今のようにひどく子供っぽくなる。もしかするとこの人、ふだんは人に挨拶なぞしないのでは？

小さな丘が見えて来た。丘の上では、牛が昼寝をしている。ア、あれは、どこかで見た襟巻、狐だ。狐が走っている。グリーンという音がして、飛行機が下りて来た。ヘリコプターから、グライダーまでも……、飛行訓練所でもあるのかしら。氣をとられているうちに、だんだん列車のスピードが落ちてゆく。ガタンと音がして列車が急停車した。

「また、どうせ豚の親子さ」

野菜畑に走り込んで行くのは、親豚と仔豚数匹、生意気に列車の真似して一列に連なっている。あんな風に走るから、人間サマが、ソーセージにしようなどと思いついてしまうのに。

この列車、いったん止まるとなかなか動けないタチらしい。シュウオーツシュウオーツと何回もくり返して、ヤッコラサと動き出す。

ゴーッという音がして、急に暗くなった。ジョニーは煙でむせかえった。ハロルドが慌てて窓をしめた。トンネルに入ったのだ。山もないのに？　なんだか無理やりに地底に連れ去られたような気がする、でもうれしい。

で、トンネルを出た。と、そこは花畑だった。色とりどりの花の群落が続き、列車の中は、花の香りで一杯になった。その花畑のずっと奥に、先ほどの飛行機やヘリコプター、グライダーがオモチャのように並んでいるのがみえる。前方には、高い樹々をバックにした、まるで西部劇に出てくる総督官邸のような木造の大きな建物が見えて来た。ホテルだろうか、駅かな？　自動車一杯で、人間の動きも激しい。汽車は、その総督官邸の斜め前、ちょうどテラスのようなホームにすべりこんで行く。

「さあ、着いた、降りよう」

ホームに並んでいたレストランのボーイのような制服の男たちがいっせいに振り返った。ジョニーは、切符のないことに気がついた。そんなことはお構いなし、ハロルドは慣れた様子でホームにおりると、そのままのいない改札口から出ようとする。慌てたように、男たちがかけ寄って来て、二人の前に整列した。変な人たち、足の長さ順に並んでいるみたい？

「お帰りなさいませ」

ジョニーはびっくりしてハロルドを見上げた。車中で見せていた無防備な笑顔はなく、ものごとくに慣れ切った人のひどく洗練された都会的な横顔がそこにあった。玄関では着飾った客たちがハロルドに気がついて立ちどまり、笑顔をみせて会釈する。召使いたちが、主人を迎える緊張を示していた。

「さあ、こっちだ」

うながされて、玄関に入った。吹き抜けになったロビーには、ゆったりとしたカーヴの螺旋階段がある。そこを今や、人々がのぼろうとしているところだった。花畑の野生のにおいとは異なっていた、人工的で贅沢な香りに、ジョニーは、咳き込みそうになった。その香りにふさわしい、世間さまよりは半オクターブ高い声が響いた。

「まあ、ハロルド、主役のいないパーティーなんてあって？」

輝くばかりの金髪を肩にたらし、細おもてのノーブルな顔立ちの女だった。そういう彼女自身、この場の主役のような自信たっぷりな表情をしている。

「ケイト、今日はまたひときわきれいだね」

ハロルドの声も、もう落ち着いた主人公のそれである。

「ハロルド、今日こそ、君の汽車を一台わしのジェットととりかえさせるぞ」

浮き世離れた話題をもって、一人の紳士が横から口を挟む。大きなお腹のこの紳士は、そうなると、自分のオフィスでは六台の電話に一度に指示を出しているやり手の実業家かも知れない。

「ねえ、ハロルド、あの汽車ってそんなにお高いの？」

背中のかいた（おかげで背中ソバカスがよく見えるのだけど）赤いドレスの女が、ハスキーな甘い声でハロルドにしなだれかかる様子をみせた。

「どうしたのよスーザン、いつからそんなに世帯じみたの？」

「だって、私、揺れた拍子にジュースこぼしちゃったの」

「君だったのか、車掌がなげいてたぜ、絨毯のシミの模様がどうもあかぬけないって」

ジョニーは吐き気に似たものを覚えた。つい今しがたまでひろがりかけていたゆたかな夢は無残にもつぶされそうではないか。お金持サンのお遊びにお付き合ひさせられている？ のぼりかけた階段をかけ降りてしまいたかったが、冗談をいいあいながら次から次へとぼってくる人々に、押し上げられるように、のぼらされていた。すでにいやもおうもなかった。

その二階の広間では、楽団がワルツを演奏していた。まるで国賓を迎えた大統領主催の晩餐会みたいなごちそうが並び（細かいこと書きたくても、おいしいに違いないと思うだけで、どうにもよく解らないのでアリマス）、白い服のボーイたちが酒を配り気を配っていた。昼間のパーテ

イーなので人々はさりげない服装をしているが、どの服も流行の最先端をいつていた。壁に並ぶ絵は、クレイ、ブラック、シャガール、マティスやピカソの初期のもの、その他モロモロ、ように値段の高そうなものばかり、間違いでなければ、本物だ。庭に面して太い柱に支えられたバルコニーがあり、樹々に囲まれた湖のような大きな池の水が陽にきらめき、白い帆のヨットが二艘、浮んでいるのがみえる。なんですか、まるで全盛時のハリウッド映画のセットのようではないですか。バルコニーの下が騒がしい。やがて、狩猟服姿の初老の男が、身体中で興奮しながらかけ上って来た。

「ハロルド、二匹だ、狐を二匹しとめたぞ。見にこんか」

キャットと女たちが、チャーム・スクールで練習したような、醜く見えない方法で、顔をしかめて見せた。ハロルドは、グラスを片手に首だけで振り返った。

「ロードンさんもおおげさな。ライオンでもしとめた時、教えて下さいよ。さあ、シャワーでも浴びて」

「いやあ、わしゃ、驚いた。君の先祖がこの森を手離すと言ったわけがやっと解ったよ」

狩猟服姿の男は、まだ興奮からさめやらない顔で螺旋階段を下りていった。

アメリカという国は収入による身分がない、自由な国というPRが行き届いてるのだけれども、その実、住むところによってどの程度の階層か解って、イロイロ、マア？ という飛んでもない国だそうだ（もしかしたらヤッパリ当り前の国なのよネ）。昔は最高級地だった場所が、いつのまにかあまりにオフィス街に近いという理由だけで、通勤者たちのベッド・タウンになったりす